［第1］問題把握（意識）の概要

Ⅰ　歴史的位置づけ〔冒頭の《歴史図式》参照〕

A．3つの世紀末大旋回（18－19－20世紀末）における20世紀末大旋回（1971-81-91＝を各階梯として進行しはじめる戦後冷戦体制の解体から再編へのプロセス）の独自的位相 ── 資本と国家の止揚へ向かう世界史＝人類史的過渡期の開始。

1. 19世紀末独占段階移行との対比で ──19世紀末大不況→Ⅰ大戦を通じる資本主義のアメリカ段階の成立からⅡ大戦後冷戦をつうじるその終焉への一時代の介在（大旋回の世界的統括者の退場）
2. 18世紀末産業革命＝資本主義確立との対比で ──大戦と冷戦の全過程を通じる20世紀科学＝技術革命の軍事→情報－金融－産業革命への新展開【人間労働の対象世界の「極大」「極微」界への拡大・深化、それをとらえる労働手段領域の「道具」系から「言語」系への大旋回、そしてそれらと対応する人間労働力主体の側での直接的労働から一般的＝科学的労働への大移行、総じて物質代謝の人間社会的構成そのものに及ぶ革命的な「階層」遷移（地球環境問題の基底） ── 大旋回を演出する舞台装置と主役たちじたいの大転換】

B．この人類史的過渡期（70's→）における「ポスト冷戦」期としての90年代の独自的地位 ── 過渡期の《資本主義＝アメリカ的ラウンド》、その歴史的意義と限界の開示（のはじまり）。

1. 冷戦後世界再編（20世紀第3度目の戦後再編）の開始として、冷戦「勝利者」アメリカ主導で、この過渡期の「方向と形態」が確定し（アメリカ「再生」から「独り勝ち」へ）、その限りでの一応の「帰結」を開示しはじめる。
2. いまその内容を、この過渡期の世界史的推進軸をなす情報革命と金融革命（→世界市場革命）のポスト冷戦下の連繋がつくり出す**《新世界》**として、そのポイントを要約しておけば ──。

①情報革命が開くCyberspaceの、Internetの原理＝形式で枠組まれた《新世界》　としての先行措定＝開設、それを追う形での、軍事起源＝情報＝金融革命（MT→IT→FT）を主導とするその《新世界》の資本＝市場包摂へのラッシュ［冷戦下のIMF体制でコントロールされた財政＝所得インフレの枠に代わる、いまやその種のコントロールさえないグローバルな金融的寄生と指数函数的にふくれ上がる金融＝資産バブルの《新世界》へ］

②そしてこうした《新世界》の独占的掌握（「新独占」！）をテコに、その姿（「グローバル・スタンダード」！）にあわせた旧世界の全般的リストラの強制、とりわけ冷戦下の旧3大勢力の再制圧＝再包摂

③総じて冷戦帝国主義から「Cyber帝国主義」への転成ともいうべきアメリカ＝ポスト冷戦世界戦略の起動と「21世紀型危機」の開始（97－）、そしてそれを「通路」とする「21世紀型展望」の具体化として。

Ⅱ　論点集約 ── **情報革命のひらくNet《新世界》の資本と国家による包摂（資本主義的利用）は可能か。機械の資本主義的利用＝包摂の場合との対比（産業革命との対比軸）。**

A．前提 ── Net成立の歴史的位置・意義にかんする3つの基本点（なお，Net成立に至るME＝情報＝通信革命の《3段図式》については、付属資料参照）

© 1999 Katsumi Minami

1. （20世紀末大旋回の「終点のシェーマ」の先行提示）コンピュータ・ネットがつむぎだす電子情報空間Cyberspace（物理的＝社会的制約のない）を、そうした本性にふさわしい共有にもとづく分散・自立的処理＝利用の原則に立ち（Arpanet起源　　軍事の皮肉！）、万人にたいして等しく開かれ、自己増殖を遂げる単一の《新世界》として編制したこと。それは、**かの《共有にもとづく個人的所有の再建》**（マルクス）という将来社会の編制原理を、独占と集中の原理が支配する地上の世界に先だって、このCyberspaceの編制原理として実現したものともいえ、いま試みに世紀末大旋回の波に洗われる地上界を「起点」とすれば、この過渡期の向う「終点のシェーマ」の先行措定としての意味をもつ。
2. （資本と国家に先立っての、その先行措定）そのような性格からそれはまた資本と国家の枠内で進められてきたCyberspaceの利用計画（85年来の国防省主導のCALS、92年NII、95年マイクロソフトのMSNなど。総じてcyberspaceの国家と資本の統制圏内への囲い込み、掠奪が共通項）のなかからではなく、そこから自由な大学・民間研究者たちの創意と世界的な共同作業の成果として、それらいわば上からの試みに先立ち、それらを一挙に御破算にする形で成立、もはや上からの統制のきかぬ、自律的に増殖を遂げる草の根Netの世界大の集成へと、まさに文字どおりの《新世界》としての本領を明確にしてきていること。
   まさに、技術史上の最初にして最大の事業と評されるゆえん。さらにいえば、一般的＝科学的労働の発展にひとつの巨大な転換点を画するもの、科学史家バーナルのいう一般的労働発展の2つの段階 ――「私的科学の英雄時代」（18世紀末大旋回に対応）から「産業界と国家の科学の時代」（19世紀末大旋回に対応する大＝中央研究所支配下の科学の制度化・分業化と軍事動員）へ ――を止揚する、まさしく20世紀末大旋回に応答的な第3の段階　　そこでは、万人に開かれた世界大のコンピュータ、世界大のデータベースたるNetの共有を基盤として一般的労働の文字どおり世界大の連帯と共同のコミュニティが、それにつらなる間接労働・直接労働の裾野をまきこみつつ開かれてゆく（「社会的個人」としての労働者の自己解放への展望）―― への移行の開始を告知するものとすべきではないか【じじつ、Net開設と軌を一にして進む公私の大研究所の解体―― 研究者の起業家への分解・自立（スピンオフ）　　さらに「解釈」から「変革」へと進む「哲学者」ならぬ現代科学者＝一般的労働者像の転成さえ叫ばれる！　むろんその資本主義＝アメリカ的外被では厳密をきわめた「結果」査定のムチとストック・オプションのアメにからみとられた現代版科学者版sweating systemの形をとるにしても、すでにその背後では、かの無償の公開ソフトLinuxの急成長に象徴されるように、そうしたアメとムチの地平を破るボランタリーな開発者たちの世界大の協同＝協創が、このNet上の全く新しいタイプの「工場」制度として着実に広がっていく（オーウェンの夢の実現！）。】
3. （20世紀末大旋回の向う基本軌道の設定）。以上の2点から必至となる、企業－市場－国家（さらには社会生活一般）をあげての雪崩をうつNetへの対応（「Netラッシュ」）と、それをつうじる企業－市場－国家のNetへの包摂の発展、図式化して**《Net先行（ポジ・テエゼ）－Net対応（ネガ・アンチテエゼ）－Net包摂＝同化（ポジ・ジンテエゼ）》の弁証法**が、この歴史釣過渡期の推進軌道＝基本線となり、またこの過渡期の全景を染めあげる《大競争》の地域規模での環境とも戦場（→階級闘争の主舞台へ収斂）ともなること。

ともあれ、20世紀末に始まるこの人類史的飛躍もまた、旧＝現実世界の内部からストレートにというよりは、このNet新世界の創出という、いわば回り道をして、それを全旋回＝全変革

© 1999 Katsumi Minami

の推進軸として、はじめて展望をうるに至るのだ、というべきか（Internetの世紀へ）。19世紀末の危機が、その母胎となったヨーロッパ旧世界の内部の変革から直接にというよりは、新大陸アメリカの「新世界」アメリカとしての形成をつうじて、それを軸として克服に向ったように（アメリカの世紀へ）。（むろん、向う方向はこんどは逆だとしても）。

B．主点――ここで問題は本題に、すなわちこの20世紀末大旋回は、19世紀末のそれがそうだったように（ヨーロッパからアメリカへの中心移動をともなったとはいえ）、同じ資本と国家の枠内で完結しうるのかどうか、という基本点にたち帰る。この大旋回の軸となり、当面の主舞台ともなるNet《新世界》の資本と国家による包摂自体そもそも可能なのかーー機械の場合との対比で、それが問題となる。

まず、Netの本性がどうであれ、それが現実に資本にとらえられる限り、それは搾取と支配の手段以外の何ものでないこと――**機械の場合と変わらぬ鉄則＝基本矛盾**を構成する【そこからは、18世紀末の大工業の生誕を機に起こった「自然と風習、性と年齢、昼と夜に関するあらゆる制限を粉砕」する資本の側からの「雪崩のように強力かつ無際限な突進」（マルクス）、それが帰結する地上の地獄絵と続く苦難の闘争史の、こんどは一般的労働の大群を一方の主軸にすえた地球的規模での再版は不可避――《Net対応》の規定に際しての基本課題の所在】。だがここでの問題は、さらに一歩進んだ地点に、すなわち、**この基本矛盾の展開の歴史的基盤（舞台装置と登場者）が機械からNetに遷移するとき、その矛盾＝対抗の性格、その運動の方向はどう変わるのか**（資本の支配の確立、再確立に向かうのか。循環的であれ段階的であれ、もはやそうした中間的な調整（「レギュラシオン」！）を許さぬ止揚の過程に進むのか）、その一点にすえられる。問題を二様に論じていたと思われるマルクスにならえば――。

1．機械の資本主義的利用の場合との対比から。

《資本の固定化－回定資本の巨大化の問題》との位相差

1）まずNetは、上述の本性、成立経緯から明白だが、機械や土地、一般に地上の生産手段と違って、単一・公開・無辺の電子情報空間を構成し、その意味でまさに《新世界》を構成し、原理的に独占も分割所有もできず、共有できるだけである。共有に基づいて本来無限なその機能を開発＝利用してゆけるだけだ。《Net対応》のこの最初の関門で、資本は、この《新世界》を無限に拡大してゆく共有領域として抱え込むことになる。〔《共有にもとづく個人的所有の再建》へのひとつの磐石の基礎の措定！〕

2）さらに、Netの多様かつ不断に高度化してゆく機能を競争と蓄積の新たな軸足にくみいれてゆくためには、ここでも機械や地上の生産手段と違って、Netを己の利害にあわせてかえてゆくのではなく、逆にそれ自身をNetにあわせて限りなくつくり変えてゆくことが要求され、このいわば資本の無限の自己否定が《Net対応》をめぐる大競争の強制法則となり、資本にとっての新たな「死活問題」ともなる（《Net対応》がリストラの軸となる必然）。Netはもはやツールでなく世界大のインフラであり、このインフラは上述のとおり、己自身の、資本から独立した、むしろ正反対の編制と運動の原理を持っており、その全力能の発揮はただ、その原理の純粋な実現、その度合如何にかかっているからだ。この矛盾は、Net以前の段階（MF－PC－LAN）ではなお「情報化のパラドックス」という別の未熟な形をとって現れているが、いまや**《Net対応》における主要矛盾**として、まさに「絶対的」となり、もはや

© 1999 Katsumi Minami

いかなる中間的な「調整」も許さぬ地点へと事態をすすめてゆく。将来社会の骨格も、この矛盾のなかから、その発展をつうじてはじめて展望されてくる【当面の第一線Intra－NetからExtra－Netへ。Netを共有ベースとするグローバルな産業連関の各要衝部のマトリックス型オンライン運営への編入（シスコのCCO、GEのTPN）、さらには産業連関一般のNet包摂＝一体化の機構の形成へ（国独資をベースに構想されたレーニンの「生産と分配の社会的運営の機構」の歴史的限界の止揚）】。

《機械にあわせた労働規制－実質的包摂の問題》との位相差

機械がNetに、直接的労働が一般的労働に、主軸転換を遂げるとき、Netにあわせた労働の規制＝包摂のことも、機械の場合とはまさに逆の方向に、すなわち「所有と労働との分離」に発する「労働と知識の分離」「労働と決定の分離」の諸原則（資本主義的労働統轄の3原則）は、《Netと労働との一体化》を軸にその反対方向に転ずるほかなく、ここにも現れる同じ矛盾の「絶対化」はもはやいかなる中間的調整をも許さぬ地点へと突き進む〔テイラー＝フォードにかわる新たな統治形態の模索も結局は統合＝統轄の名にも値しない「結果重視」から「労働賭博（ストックオプション）」の「制度化」に帰着する！〕

ともあれ、機械による資本の労働支配の確立を説いたマルクスは、まさにその確立が、他面同じ機械の技術的本性（マルクスはそこに「革命」をみた！）にしたがって含まざるをえない《労働の転変、全面的可動性》のうちに、すでに「全面的に発展した個人」への展望をみ、この両面の矛盾の「絶対化」の必然のうちに変革への「唯一の歴史的通路」を喝破したのだとすれば、機械にかわってNetが舞台中心を構成する20世紀大旋回をまえにして、われわれは**いま**何を語り**継ぐ**べきなのだろうか。

2．機械＝固定資本のうちに体現された一般的＝科学的労働の利用の場合（Gr．）との対比から。

マルクスは、機械＝固定資本の拡大のうちに、すでに直接的労働の支配［価値法則成立の社会的前提＝基盤］を脅かす一般的労働の成長を展望し、そこに価値法則になじまない領域の拡大を看取、その線上で「交換価値に立脚する社会の崩壊」さえ予告していたが、いまや資本はそのまさに価値規定の基礎を欠くその同じ領域を、Net上の《新世界》として、しかもなんと日を追って競争と蓄積の軸足がそこへ移ってゆく**20世紀末大旋回の管制高地として**、抱え込むに至ったのだ、ということ、そしてそのことが、この《新世界》にめまぐるしく登場する資本の新世代の運命をとらえ、没落＝リストラ下にある旧世代＝旧独占に対してもきわだった特徴（資本・独占としての存立の商品経済的基礎の欠落→いちじるしい賭博的不合理性と不安定性＝過渡性）を与えるに至っているということ。

《いうまでもなく、Nasdaqを培養基としてシリコンバレーに集う資本の新世代のことを念頭においているのだが、そこで以下の**第二の部**では、いまその頂点に君臨する　インテル・マイクロソフト・シスコシステム（Wintelco.「3兄弟」！）をとりあげ、このいわば《新独占》のよってたつ経営内容に一覧を与えることで、以上の**第一の部**の把握を補うことにする》

© 1999 Katsumi Minami